

都市における地域学としての「池袋学」の可能性(一)

——立教大学と東京芸術劇場による地域連携の実践

後 藤 隆 基

はじめに

一九一八年(大正七)に立教大学が築地から移転した頃の池袋は一面の麦畑で、いまだ郊外の様相を呈していた地域の発展とともに大学も時を重ねてきた。そもそも池袋は、一九〇三年(明治三十六)の池袋駅開業に端を発する歴史の若い地域といつてよい。関東大震災後の都市復興のなかで、池袋も市街地化が進行し、それと歩調を合わせるように、立教大学も、一九二二年(大正十一)には四百名に満たなかった学生が、一九三二年(昭和六)には千三百名に増加したという。当時の『立教大学新聞』(一九三一年十一月九日付)にこんな記事が載っている。

現在は帝都北西の交通の中心地として最高学府の存在する商業地として、また保健上の適地としてその頃(一九二二年)より市内外からの移住者が多く数年の内に現在の大をなした。／〔略〕今池袋の人達に対して池袋の名前を問へば即座に立教大学を答へられるであらう。〔略〕漸次総合大学の機運に向ひし暁は池袋町民の誇りはより輝くであらう。

(武藤武雄「輝く立教と池袋」)

「立教と池袋との不可分な誼は将来益益その実を高め、両者共栄の本業を尽すべきである」(同前)という意識は、現在からみれば聊か大仰の観もあるかもしれないが、池袋

という地域と立教大学の（初期段階における）関係性を示す言表として注目される。

その後も、第二次世界大戦をはさんで大学と地域のつながりは持続するが、しだいにその関係に変化が生じていった。つまり、かつては「地域イコール立教だったみたいな部分があったわけですけども、いまはそうじゃなくなっている。どうも池袋の立教という意識が薄い」（『オール立教人まつり』の仕掛人——宮崎尚志氏に聞く——）『立教』第一〇四号、一九八三年二月）ということになる。ここから、まちを挙げたイベントや、地域との共生を前面に出した大学の広報戦略等を通じて大学・地域の関係が再構築されていくのだが、そのあたりの動きは別稿¹で概括したことがあるので細かには述べない。

また、立教大学（の教員）が関わる池袋界隈の地域研究には、歴史学者の林英夫氏による豊島区史研究や、社会学者の松平誠氏によるヤミ市研究、さらに一九九〇年前後に連続的に実施された社会学部の研究プロジェクトによるさまざまな思索の蓄積等²があることを付け加えておこう。近年では、社会学部や経済学部等の個別のゼミ活動を通じて地域（学習）活動が実践されている。

東京芸術劇場は、一九九〇年、西口駅前³の東京学芸大学

附属豊島小学校（旧豊島師範学校）跡地に開館した。建設計画の当初（一九七七年。当時の仮称は芸術文化会館）は、舞台鑑賞だけでなく、都民参加の開かれた芸術文化創造拠点をめざしており、地域活性化への期待が寄せられたが、都財政の悪化により建設計画は長らく実現しなかった。開館後は主として貸館事業を中心に運営され、地域との関係は希薄だったが、二〇〇八年に高萩宏氏が副館長に、二〇〇九年に野田秀樹氏が芸術監督に就任し、新たなスタートを切った。

池袋西口の大きな二つの拠点である東京芸術劇場と立教大学のつながりも、従来希薄であった——といわざるを得ない。そんな中で、二〇一一年六月七日、東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）と立教大学（学校法人立教学院）との間で、連携に向けた包括的な協定が締結された。この協定は、各々の施設の活性化および各種の事業を通じて東京都における地域活性化と芸術文化振興に向けて連携し、協力し合うことを目的とすると謳っている⁴。締結当初、具体的な事業内容は未定だったが、双方の連携による事業の企画・実施、広報協力、施設利用などの協力を行なうこととされていた。

本稿では、二〇一一年の協定締結をメルクマールとして

両者の関係を捉えなおし、近接する公共劇場と私立大学の協働が果たす地域連携の実践について検討する。とくに二〇一四年度からはじまった連携講座「池袋学」がいかに生成されたかの道筋を整理し、開講から二年が経過した現状と課題、今後の展望について考えてみたい。

一 立教大学と東京芸術劇場の関係

立教大学と東京芸術劇場は、どのような関係を結んできたのか。近年では、立教大学の入学式（二〇〇六年）やメサイア演奏会等の大学主催行事に加え、立教大学交響楽団や庶民吹奏楽団、グリーククラブといった学生団体の恒常的な利用も続いている。わけても東京芸術劇場の副館長に高萩宏氏が就任した二〇〇八年以降、大学と劇場の交流にも新たな動向が見えはじめた。

二〇〇九年九月、東京芸術劇場から立教大学に協定に関する打診があり、大学の渕博子氏（当時・ポランティアセンター職員）と千石英世氏（当時・文学部教授）、さらに高萩氏と学生時代から旧知の間柄だった吉岡知哉氏（法学部教授、後に総長）を交えて、同年十月に最初の懇談が行なわれたという。以下に掲げる東京芸術劇場との共同企画も、渕氏と千石氏を中心に実現したものであり、ここでは、

立教大学と東京芸術劇場の協定締結が、両者の少なからぬ協働の蓄積の上に成立している、という前提を示しておきたい。

たとえば二〇一〇年、イスラエルでドラマトゥルクとして活躍するヴァルダ・フィッシュ氏の講演会「イスラエルの現在 演劇から見た文化状況」（十月二十三日、立教大学文学部文学科英米文学専修主催、東京芸術劇場協賛）が立教大学で開催された。日本とイスラエルの外交関係樹立六十周年記念事業および東京芸術劇場とテルアビブ市立カメリ劇場による国際共同制作プロジェクトとして、ギリシャ悲劇『トロイアの女』（蜷川幸雄演出、二〇一二年）を上演する前段階のワークショップをイスラエル人と日本人の併優で行なうため、東京芸術劇場の招聘でヴァルダ・フィッシュ氏が来日していたことによる。

二〇一一年には第六回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館の一環として、トークショー「グローバル演劇都市池袋！」（七月二十九日）が立教大学で催され、高野之夫氏（豊島区長）、高萩宏氏、相馬千秋氏（当時・フェスティバル／トーキョー（F/T）プログラムディレクター）、新野守広氏（ドイツ演劇、異文化コミュニケーション学部教授）、J・T・ドーシー氏（アメリカ演劇、当時・

文学部教授)、細井尚子氏(中国演劇、異文化コミュニケーション学部教授)、司会として千石英世氏が登壇した。立教大学には多様な領域の演劇研究者が所属しているが、彼らが一堂に会し、かつ外部から、豊島区の文化振興政策を推進する高野氏、現代演劇の最前線で活躍する高萩氏や相馬氏といったゲストを招くようなイベントが学内で催されることは管見の及ぶかぎり例がなかった。

以上に鑑みれば、協定の締結と以降展開される(であろう)事業も、それに先立って試みられてきた大学と劇場の少なからぬ協働の延長線上に位置づけられるといっている。ただしそれらは担当者レベルの、当該問題に関心のある個人と賛同者の小さな動きが起点となる、いわば属人的なものである。その個人が組織からいなくなったとき、それが停滞もしくは持続不可能な状態に陥ることは殊更いうまでもない。その持続可能性をいかに保証しうるか。大学においては、淵氏(二〇一三年三月退職)や千石氏(二〇一四年三月退職)らの後継が求められることは必ずであった。

二 協定締結記念シンポジウム

前掲のトークショーの終盤、立教大学が果たしうる演劇

——芸術・文化を通して地域連携の可能性に関する質問が客席から発せられたのに対して、高萩氏から「六月に大学と劇場との間で連携協定を結んだため、今後は何かしらの協働が期待できるのではないか」との応答があった。この時点では、協定について対外的な広報等は行なわれていなかったが、稿者が大学広報課に問い合わせたところ、協定を担当する総長室教学連携課(二〇一一年に社会連携全般を担う部署として設置。二〇一六年度から社会連携教育課)を通して締結の事実が確認できた。

重言ながら、立教大学と東京芸術劇場の連携協定に関して、そもそもの、かつ最大の問題は、協定は締結したものの具体的な中身が決まっていないという状況だった。そこで、当時立教大学大学院文学研究科に在籍し、同ESD研究センターにリサーチアシスタントとして勤務していた稿者は、センター長の阿部治氏(社会学部教授)と相談しながら、ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育)が重視するサステナビリティの観点から、地域との連携をめざす大学と、地域文化を発信する公共劇場との結節点を探るべく、まずは双方の共通地盤としての池袋西口を視座に据え、大学・劇場という二者を軸に、地域も巻きこむ形での協働と有機的なパート

ナーシップの可能性を検討した。そしてESD研究センターが企画・監修する大学主催事業「ECO opera」として、連携協定締結記念シンポジウム「西池袋」を刺激する！——東京芸術劇場×立教大学による持続可能な地域づくり——（二〇一一年十一月二十八日）を立教大学で開催。東京芸術劇場から福地茂雄館長（当時）と高萩宏副館長、立教大学からは吉岡知哉総長と阿部治氏が登壇した。地域づくりにおいてはボトムアップ型の活動が当然重要であるが、立教大学と東京芸術劇場の連携をみる場合、まずは協定締結という機に乗じた一種のトップダウンでそれぞれの組織自体に働きかけることが、両者の関係を駆動させる契機となると考えたのである。

なお、二〇一一年八月、池袋西口公園の利用法と運営について研究すべく、池袋西口の地域づくりを先導してきたNPO法人ゼファー池袋まちづくりのメンバーが「劇場広場研究会」を発足し、周辺の地元住民、商店、企業、大学、劇場、NPO等に所属する有志の参加を得て毎月定例で行なっていた。立教大学教学連携課主幹（当時）の近藤泰樹氏の仲介で稿者もこの研究会へ出席し、地元関係者の理解を得、地域との協力体制を敷いたことがシンポジウムの企画・実施に際して大きな援けとなったことも付記しておく

たい。すでに阿部治氏がESD研究センターや自身のゼミでの活動を通してゼファー池袋まちづくりと緊密な関係を構築していたことも後押しし、このつながりは後々まで有効に作用することになる。折柄、地域を含めて池袋西口に関する議論の機運が高まっていたことも、大学と劇場の連携を粗上に載せるための時宜にかなっていたといえよう。シンポジウムの内容については報告書⁶をご参照いただくとして、ここでは概要のみを摘記する。

当日は劇場・劇団関係、省庁・東京都・豊島区など行政関係、各種企業、マスコミ・出版、さらに近隣の町会・商店街など、幅広く多様な立場から約二百名の参加者を得た。このときは、主に当事者間の意識共有（大学・劇場の両者が拠って立つ「西池袋」という地域のイメージと協働ビジョン）と連携協定の対外的な周知は実現したものの、具体的な方策の提案には至らなかったが、シンポジウムで示された連携の可能性に紐づく事業案を再掲しておく。すなわち、①大学・劇場がそれぞれに所有するパイプオルガンを利用した企画、②演劇（音楽）鑑賞のための入門講座、③池袋西口公園での共同企画、④学生による事業提案や劇場および地域への参画、⑤大学のキャンパス・教室群の活用、⑥初等教育からの演劇教育導入の可能性、⑦インター

ンシップ制度の整備、⑧定期的な講演会やシンポジウムおよび連続講義（講座）の実施、という八点である。爾後の展開をみれば、後述のごとく、⑧として「池袋学」が構想され、③に関しても、二〇一五年度の戦後七十年企画において地域との協働のもとに一つの実現をみることにとなる。学生団体から劇場への企画提案（具体的な実現如何は不明ながら）もあった。

大学と劇場という組織同士が具体的な事業を考える場合、学生や各部局からの提案を受ける窓口や、二〇一一年のシンポジウムにおいてESD研究センターが担ったようなハブ機能を、内容や状況に応じた部局が果たさなければならず、それぞれの組織内部での連携や情報共有も課題だった。その点において、立教大学では教学連携課、東京芸術劇場では事業企画課が協定の担当部局として以後の連携を支える基盤となり、大学・劇場双方が主体的に関わり合う体制がととのっていく⁷（しかし大学においていえば、学内周知の困難もあつてか、情報の集約・共有等が十全に機能しなかった部分もあつたようだ）。

そうした大学・劇場の連携を模索する動きの中から生まれた事業の一つが「池袋学」である。次節以降、両者の連携事業の一環である「池袋学」について述べていく。

三 「池袋学」の構想

二〇一二年四月、ESD研究センターが、文科科学省オープン・リサーチ・センター整備事業の期間（二〇〇七～一一年度）を終えたため、ESD研究所（所長・阿部治）と改称し、大学の附置研究所として再始動した。予算・人員規模が大幅に縮小されて従前のような活動は困難になったが、ゼファー池袋まちづくりの協力を得、前年のシンポジウムを継承するかたちで「西池袋」を刺激する！ Part 2 —— 豊島区制施行80周年で池袋西口公園が変わる ——（同年七月十日、立教大学）を実施した。高野之夫氏、高萩宏氏、甲斐徹郎氏（株式会社チームネット代表）、石森宏氏（ゼファー池袋まちづくり理事長）、小林俊史氏（同副理事長）、西原廉太氏（立教大学文学部教授、当時・社会連携担当副総長）、阿部治氏が登壇し、池袋西口公園を通じた地域連携のありかたが検討された。これを契機として、立教大学と東京芸術劇場も参画する「西池袋みどりのアートカフェ」（豊島区立池袋西口公園の多目的活用に関する社会実験）が同年九月にはじまり、地域に根ざす複数の主体が連携して公園を運営する取り組みが展開されるようになった¹⁰。

右のシンポジウムの席上で、阿部氏から「池袋学」に関する提案があった。すでに事前協議の段階から「池袋学」構想は俎上に載せられており、学生をはじめ一般参加も可能な連続講座として、座学とワークショップの両輪での実現可能性や運転資金の問題なども検討されていた。これが、二〇一四年度からの東京芸術劇場と立教大学による連携講座「池袋学」の開講へとつながっていく。二〇一三年度はその準備の年となった。

周知のように、地域の名を冠して「〇〇学」を称する地域学／地元学は日本各地で数限りなく行なわれている。それらは地域の住民が、ときに外部者と交感しながら、自分たちの足元にある過去の知恵や伝統、歴史、文化等の地域資源を掘り起こして新たな意味づけをし、地域に対する誇りを持ち、地域ごとの方法によってそれぞれの現在の課題の発見・解決に生かす学びの運動である。その多くが、いわゆる「地方」での取り組みであるが、都市（首都圏）において地域学／地元学はどのように存在しうるのか。たとえば、東京都内——とくに副都心部でも、國學院大学による「渋谷学」¹²や早稲田大学による「新宿学」¹³が行なわれている。これらとの比較や都市という地域（あるいは地域としての都市空間）の問題は紙幅の都合上、別稿に譲るが、

渋谷、新宿、池袋の違いを一つ端的に言えば「渋谷は渋谷区の中心、新宿は新宿区の中心であるのと違って、池袋は池袋区にはなく、豊島区にあるということ」¹⁴で、このことが存外重要な意味を孕んでいる。つまり、多くの地域学／地元学が広域な「地方」あるいは行政区画を扱い、名称化しているのに対して、ここでは「池袋」という都市の中の狭い地域をあらかじめ対象としている点である。

「池袋学」の初代座長を務めることになった渡辺憲司氏が「池袋学」という言い方を初めて口にされたのは、立教大学元教授で日本近代史が専攻の林英夫先生である」¹⁵と述べている。豊島区立郷土資料館の秋山伸一氏によれば、林氏が「豊島区の多彩な学校の光輝——池袋学のすすめ——特に若い人へ」（『池袋モンパルナス』第七号、二〇〇六年三月、池袋モンパルナスの会）と題された文章の中で「児童の村小学校をはじめ特徴ある学校が池袋およびその周辺に集中していたことを紹介し、そこから「池袋学」なるミクロの地域史の必要性を提唱した」¹⁶という。渡辺氏はかつて林氏が「地方」という言葉が「中央に対する従属的姿勢に流れることを危惧」して「地域史という新たな姿勢を示されていた」とし、以下のように続ける。

「池袋学の構想に際して」池袋学ではなく、豊島学といった言い方でもいいのではないかと話も出た。確かにその方が地域的に広い範囲で考えることが出来る。しかし、私のきわめて個人的な言い方をすると、豊島学には、豊島という歴史の意味の広さや深い蓄積がある一方で、中央に対応するような旧来の地方史研究の残像を残しているように思う。現代史を扱うにはいささか研究の深度が、先を見えにくくするような気もした。¹⁷

こうした着地点に至るまでには、立教大学教学連携課、東京芸術劇場事業企画課、立教大学ESD研究所、ゼファー池袋まちづくりの担当者が協議を重ね、その過程でいくつかの検討課題が挙がった。

第一に、柱となるコンセプトの問題である。多くの地域学／地元学が存在するが、果たして先行する種々の地域（地方）をめぐる事例が、都市である池袋においてどのような変奏、展開されるか。また池袋に居住する定住者、通勤・通学・観光者などの流動者といった対象をどこに想定するのか。事業としての着地点をどこに置くか。後述する内容の問題とも重なるが、足元を掘り起こし過去を振り返

るだけでなく、それが未来に向けた方途を導きだすための契機となるような仕掛けをつくる必要がある、といった提案である。その中では「池袋未来学」の名称案も出た。

第二に「池袋」の範囲に関する問題である。池袋は駅を挟んで東西に分かれており、西口と東口は諸点に及ぶ差異がある。ここではまず大学と劇場の立地する西口に焦点をあてるが、東口はもちろん、隣接する雑司が谷なども含めた地域にまで対象をひろげて考える必要があるとの意見も出た。

第三に、講座の内容についてである。池袋の特徴はしばしば多様性や雑多性、他者（よそ者、外部者）を受け入れる寛容さ、といったキーワードで語られがちだが、池袋の独自性を具体的にはどこに見いだすのか。まずは池袋の歴史や文化的事象の発掘と再考を図りながら——郷土史的な歴史探訪のみを目的化するのではなく——現在の地域的課題の発見と解決に資するテーマも併せて選定し、未来志向のビジョンを明確化する方向性が議論された。くわえて座学だけでなく、実際に受講者が地域に出るワークショップ等を行ない、受講者自身が地域に働きかけ、地域と関わり合う機会を設ける必要も問われた。

第四に、企画立案、運営、広報、申込方法、予算等、講

座の具体的な運営体制についてである。

そうした半年余の協議を経て、以下の方針が固まっていた。

- ①二〇一四年度から三年間を一区切りとすること。
- ②池袋西口を基本的な対象地域とすること（テーマによつては東口も含む）。
- ③東京芸術劇場が春季三回、立教大学が秋季三回を担当。それぞれのリソースを活用した講座を企画・運営し、一講座は二時間程度とする。場合に依じて夏季・冬季に特別講座を実施すること。
- ④参加費（資料代）として千円を徴収すること。
- ⑤ウェブ上に専用の申し込みフォームを置き、立教大学と東京芸術劇場のHPにリンクを貼る形で参加者を募集すること。
- ⑥成果を将来的に書籍化し、出版すること。
- ⑦座長を渡辺憲司氏（立教大学名誉教授。当時は立教新座中学校・高等学校校長、二〇一五年度から自由学園最高学部長）が務めること。

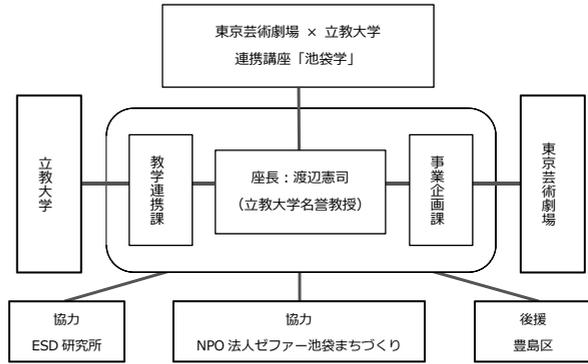
二〇一四年度の講座案の検討と並行して、二〇一四年一月十八日には、開講記念シンポジウム「池袋学」への招待（ひと、アート、環境から池袋を考える）を東京芸術劇

場で開催。高野之夫氏、吉岡知哉氏、高萩宏氏、後藤隆基（阿部治ESD研究所所長代行）、上野貞行氏（JR池袋駅駅長）、北川フラム氏（アートディレクター）、渡辺憲司氏が登壇して、各々の立場から「池袋学」への期待と池袋に対するイメージを語り¹⁸、学際的・領域横断的な地域学の可能性が示唆された。

四 「池袋学」の開講

池袋に「住む人、働く人、学ぶ人、遊ぶ人、みんなが参加できる」というキャッチコピーのもと、二〇一四年度から「池袋学」は開講した。前述のごとく渡辺憲司氏が座長となり、東京芸術劇場の高萩宏副館長を実質的な副座長の位置に据えた。立教大学から教学連携課（近藤泰樹氏、足立寛氏）、東京芸術劇場から事業企画課（橋爪綾子氏。二〇一五年度から三谷淳氏）がそれぞれの実務を担当し、協力団体として、立教大学ESD研究所（阿部治所長、後藤隆基）とゼファー池袋まちづくり（小林俊史氏）が企画・運営に参画。さらに豊島区の後援を得、運営体制を敷いた（図①）。

「池袋学」の開講とほぼ時を同じくして大正大学（豊島区西巢鴨）が学部共通科目「豊島学」を開講した。大正大学



図① 「池袋学」運営体制図（2014・2015年度）

「池袋学」は、同一地域に近接する私立大学と公共劇場が共に自らの立地する地域を対象に地域学を実践する点において、大学・劇場間の連携事例としては国内初の試みであり¹⁹、いわゆる劇場法（劇場、音楽堂等の活性化に関する法律）施行（二〇一二年六月二十七日）後の公共劇場――

と豊島区との協定に基づき、豊島区長をはじめ、区主要部署の幹部が講師となり、区政に関する様々な取り組みをテーマに講義を行なうもので、行政と大学の連携による大学のカリキュラムへの取りこみという特色があった。

それに対して

東京芸術劇場にとっても、重要な施策の一つと位置づけられよう²⁰。内容としては、多様なテーマと講師によって池袋の過去・現在・未来を語ることをめざし、広く一般に参加者を募った。春季三回を担当する東京芸術劇場では、池袋の文化的土壌を築いた〈池袋モンパルナス〉、〈ヘトキワ荘〉、〈セゾン文化〉の三つを三年間の共通テーマに設定する方向が固まっていく。毎年異なる講師を招聘して多角的な視点から各テーマを深める講座を構成した。秋季三回を担当する立教大学では、大学所属の教員が、多様な専門領域から「池袋」を見すえ、歴史・地域文化の再考や現在の課題の考察を通して未来を志向する企画を組んだ。夏と冬には、時宜にかなった話題をテーマにした特別講座も実施した（二〇一四年度および二〇一五年度の内容等は図②を参照のこと）。

「池袋学」は二年間で十五回の講座を開講し、それらの内容は各年度の講演録で読むことができる（二〇一四年度の夏季特別講座は未収録。二〇一五年度夏季特別講座は一部を収録）。毎回の講座が終わると（原則的に）立教大学の学生がレポートを執筆し、大学ウェブサイトに掲載することで、学生の視点による「池袋学」の理解と問い返しを行なった。これらも各年度の講演録に転載している。また学

図② 2014年度・2015年度池袋学講座

日程	タイトル	講師	申込者	参加者
2014年度【会場】春＝東京芸術劇場／夏・秋・冬＝立教大学				
春季① 5月18日(日) 14時～16時	池袋モンパルナスの時代 —街が美術を育んだ—	尾崎真人（京都市美術館学芸課長）	46名	32名
春季② 5月24日(土) 14時～16時	トキワ荘の時代 —「漫画」から「マンガ」へ—	丸山昭（編集者）	50名	35名
春季③ 6月8日(日) 14時～16時	池袋のセゾン文化 —文化戦略から演劇祭まで—	八木忠栄（詩人、元セゾン文化財団理事）	59名	47名
夏季特別講座 8月23日(土) 14時～16時	こんなにもしろい東上線 100周年秘話 —東武東上線100年と池袋の これから— ※東武鉄道と共同主催	花上嘉成（東武博物館名誉館長）、高萩宏（東京芸術劇場副館長）、渡邊裕之（豊島区観光協会副会長）、田中武（東武東上線池袋駅長）、渡辺憲司（立教大学名誉教授、立教新座中学校・高等学校校長／司会）	326名	280名
秋季① 10月1日(水) 19時～21時	池袋学と自由の発信 —池袋周辺地域の文化土壌—	渡辺憲司（同上）	99名	65名
秋季② 10月29日(水) 19時～21時	都市観光地としての池袋	安島博幸（立教大学観光学部教授）	128名	80名
秋季③ 11月26日(水) 19時～21時	持続可能な未来を志向した池袋学をめざして	阿部治（立教大学社会学部・異文化コミュニケーション研究科教授、ESD研究所所長）	77名	35名
冬期特別講座 12月14日(日) 14時～16時	柳原白蓮の戦後 —銃後の母から世界連邦運動へ—	井上洋子（福岡国際大学名誉教授、福岡県人権啓発発信情報センター館長）	140名	110名
2015年度【会場】春②③＝東京芸術劇場／春①・夏・秋＝立教大学				
春季① 5月23日(土) 14時～16時	池袋モンパルナスの原風景 —野見山暁治氏に聴く— ※第10回新池袋モンパルナス 西口まちかど回遊美術館と 共同主催	野見山暁治（画家）、押見輝男（立教大学名誉教授）	64名	50名
春季② 5月26日(火) 14時～16時	トキワ荘と池袋のマンガ文化	山田夏樹（法政大学文学部助教）	28名	20名
春季③ 7月4日(土) 14時～16時	セゾン美術館の日常 —前衛の拠点として—	新見隆（武蔵野美術大学教授、大分県立美術館館長）	35名	25名
夏季特別講座 9月12日(土) 14時～16時	戦後池袋の検証 —ヤミ市から自由文化都市へ— ※池袋＝自由文化都市プロジェクトと共同主催	川本三郎（文芸評論家）、吉見俊哉（東京大学教授）、マイク・モラスキー（早稲田大学教授）、石川巧（立教大学文学部教授／司会）	365名	320名
秋季① 10月10日(土) 14時～16時	多様な文化をうみだす都市・池袋 —都市研究の観点から考える—	三田知実（立教大学社会学部助教）	83名	40名
秋季② 10月24日(土) 14時～16時	女性が暮らしやすいまちづくり —消滅可能性都市から持続発展都市へ—	萩原なつ子（立教大学21世紀デザイン研究科教授）	57名	40名
秋季③ 10月31日(土) 14時～16時	リアル池袋論 —国際都市としての池袋—	鈴木庸介（株式会社 TOKYO STAY 代表、立教大学兼任講師、元 NHK 池袋担当記者）	78名	50名

（＊所属・肩書は開講当時のもの。申込者数はWeb・電話受付。参加者数は招待・申込ナシ等も含む）

生の積極的な参加を促すべく、二年目からは立教大学の学生は無料で受講できる仕組みに変更した。

図②にあるとおり、春季・秋季の通常講座（二年間）の平均参加者は、四十三名強。初年度よりも二年目は減少している。夏季と冬季の特別講座に関しては、規模を拡大し、ポピュラリティの高いテーマおよび講師を選んだこともあって、多数の参加者を獲得できた（夏季と冬季は参加費無料としたことも一つの要因だったにちがいない）。ただし、通常の講座に関して、テーマによってはすでに一定の知識を有する参加者と初めてその内容を聞く参加者とのあいだに受容のずれが生じ、既知で新味がないといった不満の声と、逆に全体像がわかり勉強になったという声が並存した回もあった。それらをふまえて、二〇一六年度は参加者の属性等を考慮した上で講座内容が企画された。

また前述のごとく、これまででは大学と劇場の個々のリソースを生かした講座で構成されてきたが、両者が真に連携するかたちにはなっていないかつたきらいもある。その点で特筆すべき成果として、二〇一五年度の夏季特別講座を挙げておきたい。

二〇一五年に、立教大学、東京芸術劇場、豊島区の三者が主催者となって実行委員会を組織し、戦後七十年企画と

して「池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト」を立ち上げ、ヤミ市（闇市）を視座に据えて戦後池袋の地域史／文化を考える企画を実施した。その共同企画として夏季特別講座を開催したのである。大学と劇場を軸にしながら、豊島区をはじめとする地域との積極的な協働を通して、座学的な講座のみにとどまらない、住民参加型の地域学の可能性を模索する実践的な試みでもあった²⁾。戦後の池袋では、後背地である肥沃な農村部（埼玉県等）からの鉄道を利用した物資運搬によってヤミ市が発生し、その後の繁華街としての基盤を形成した。池袋にかぎらず、都市は周縁の地域（地方）に支えられ、共存関係によって成立してきた。そして都市もまた地域の一である。都市が周縁とつながり、共にあるその関係を視野に入れることの必要性／重要性が浮上したことも、池袋（Ⅱ都市）のみで完結しない、都市における地域学のありかたを考える際の鍵になるだろう。

おわりに——展望にかえて

三年目となる二〇一六年度、座長が渡辺憲司氏から阿部治氏に代わった。交代の一因としては、大学と劇場の協定にもとづく連携事業の一つである以上、学内の専任教員が座長になるべきとの判断があった。また「池袋学」は、当

面の期間を三年間で一区切りと設定しており、全二十二回の講座をもつて一旦終了する。本稿を三年目の途中である現段階で整理するのは、それらの理由にもよる。

二〇一六年度には、七回の講座を予定しているが(図③)、最終回となる秋季第三回には「多文化共生の池袋——立教大学の果たす役割を考える——」をテーマに設定した。世界を覆うグローバルイズムの潮流の中で、池袋という地域もまた変容を遂げている。立教大学においても、留学生が二千人をこえる時代〔Rikkyo Global 24〕に、大学が地域でどのように変貌し、地域においてどのような役割を果たしていくのか。三年目を迎えた「池袋学」の最終回が、大学と地域をめぐる〈未来〉を扱うことに注意を促したいと思う。

それらをふまえて、本節では——実務の一端を担った者の私見ながら——立教大学と東京芸術劇場による地域連携の一つとしての「池袋学」の展望を記して掲筆したい。

駅(鉄道)によって東西に分かたれている観

図③ 2016年度池袋学講座 [会場] 春=東京芸術劇場/夏・秋=立教大学

日程	タイトル	講師
春季① 5月21日(出) 14時～16時	あわい(間)の街としての池袋、そして池袋モンパルナス—社会心理学からの考察—	押見輝男 (立教大学名誉教授)
春季② 6月18日(出) 14時～16時	『漫画少年』とトキワ荘の時代—世界に広がるアニメブームのルーツを探る—	加藤丈夫 (独立行政法人国立公文書館館長)
春季③ 7月16日(出) 14時～16時	スタジオ200—80年代の新しい体験教室—	久野敦子 (セゾン文化財団プログラム・ディレクター)
夏季特別講座① 8月1日(月) 10時30分～12時30分	講演会「雑司が谷とは何か」	渡辺憲司 (自由学園最高学部長、立教大学名誉教授)、近江正典 (法明寺住職)、川上千春 (日本ユネスコ協会連盟事務局長)
夏季特別講座② 8月1日(月) 13時～15時	シンポジウム「雑司が谷を中心とした地域づくり—大人と子どもと—」 * 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ESDによる地域創生の評価とESD地域創生拠点の形成に関する研究」の一環として開催	三田一則 (豊島区教育委員会教育長)、渡邊隆男 (雑司が谷未来遺産推進協議会会長)、平井憲太郎 (としまユネスコ協会代表理事)、小池陸子 (「としま案内人 雑司ヶ谷」代表)、中村雅子 (南池袋小学校校長)、葉袋奈美子 (日本女子大学准教授)、阿部治 (立教大学社会学部教授・同ESD研究所所長/司会)
秋季① 10月18日(出) 14時～16時	池袋は鉄道から始まった—池袋の鉄道史と未来—	老川慶喜 (跡見学園女子大学副学長、立教大学名誉教授)
秋季② 10月29日(出) 14時～16時	池袋は“演劇都市”になれるか—その過去・現在・未来—	高萩宏 (東京芸術劇場副館長)、後藤隆基 (立教大学社会学部教育研究コーディネーター)
秋季③ 11月12日(休) 14時～16時	多文化共生の池袋—立教大学の果たす役割を考える—	上田信 (立教大学文学部教授)、ゲスト: 吉岡知哉 (立教大学総長、立教大学法学部教授)

(* 所属・肩書は開講時のもの)

もある池袋だが、前述したように構想当初から、西口と東口の両面から考えることが課題であった。これまでの講座でもひろく豊島区全体にかかわる総論的なテーマから池袋を語る際は、東西の切り分けをしなかった。また東口における乙女ロードなど現代のアニメ・マンガ文化圏をはじめ、池袋の現在、そして未来を考える上で未開拓の領域は数多のこっている。

歴史や文化の掘り起こし、現在の課題の発見といった過去遡及型、現状把握型の講座は「池袋学」の第一ステージである、とひとまずいってよい。そこで明らかになったものをそのままに措くのではなく、そこから新たな創造的な動きや学び、地域との共創へと展開していく方途も、今後は問われていくだろう。その意味において、二〇一五年度の「池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト」は単年度の限定企画ではあったが、一つの成果と位置づけられよう。

如上の点に鑑みれば、二〇一六年度の講座の中に、雑司が谷をテーマとする夏季特別講座を組みこんだことは重要である。雑司が谷は近年、地域住民が主体となって、地域資源を活用しながら、まちづくりを進めており、二〇一四年には日本ユネスコ協会連盟の「プロジェクト未来遺産」として登録認証を受けた。大人だけでなく、南池袋小学校

の生徒をはじめとする子どもたちも、持続的な地域文化の伝承、地域づくりの担い手として活動を行なっている雑司が谷を池袋における内発的な発展の〈場〉として捉えるとともに、かつて雑司が谷は現在の西池袋も含む広域なエリアであったことから、池袋の東西をつなぐ道筋ともなりうる。これは、前年の「池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト」を継承する、地域との一体的な「池袋学」の実践でもある。

立教大学はおよそ一世紀、東京芸術劇場は四半世紀にわたって池袋にあるが、そこに属する個人は、基本的に地域にとつて外部者である。仕事等のために生活時間の多くをこの地で過ごしているとはいえ、地域に根差す定住者（内部者）ではない。その意味で「池袋学」は外部者と内部者の協働による知の運動である。

地域は動かない。しかし、そこにいる人は移動する。殊に池袋——ひいては都市の文化を考える場合、時代による環境や経済、社会の時勢などにもとない、居住・活動空間の移動は頻繁に行なわれていたであろうし、その際、通過する場としての池袋という側面も注目すべきである。池袋は（都市は、と言い換えてもいい）常に外部（者）に開かれており、むしろ外部（者）との関わりを抜きに考えることは難しい。それが〈池袋モンパルナス〉にせよ、また〈ト

キワ荘」にせよ、いずれも一時期、ある種の池袋文化圏を形成したが、各地から参集した若き外部者のたまり場であった。やがて彼らが巣立っていくとともにその場自体も変容する。池袋で蒔かれた種が、他の地域で花開き、実を結んだとして、池袋という時間／空間は、その創造成果ともけっして無縁ではない。もちろん池袋には駅前に定住者が多いという特徴もあるのであって²²、定住者と流動者の関係、その上に成り立つ地域文化のありようにも目を凝らさねばなるまい。そこに池袋という地域の特色も見いだされるように思われる。

従来も地域をめぐる様々な活動が個別に行なわれてきたが、既存の活動を外部者のまなざしから一つにつなぐことで、横断的なプラットフォームを構築する役割も「池袋学」をひろげる可能性である²³。池袋や豊島区内だけでなく、池袋に近い新宿区の落合地域に着目した「落合学」も近年、提唱されている²⁴。これに即していえば「池袋学」の主要テーマの一つである〈池袋モンパルナス〉を考える際、隣接する目白（落合）文化村なども連続的な地域文化の表象として捉え、その実態や史的推移を併せて考える必要がある。池袋モンパルナス関連の作家の作品が板橋区立美術館に多く所蔵されていることに鑑みても、行政区画をまたい

だ地域学の連携も視野に入れて然るべきだろう。

そうした内容面はもちろん、三年間の二十二講座を終えた後、以降の新たな展開を図るとするならば、立教大学と東京芸術劇場の二者だけでなく、これまで後援あるいは協力団体であった豊島区やゼファー池袋まちづくりなどを主催者に加えて、地域との協働を深化させることも一案である。豊島区が推進している「国際アートカルチャー」構想との連動や、地域を中心とした〈池袋研究会〉などを行なうことで新たな方向性も見えてくるのではないか。あるいは立教大学の教育カリキュラム等への取り込みによって学生が地域を知る／体験する機会をつくることも、大学における社会連携教育の一環として有効かもしれない。二〇二〇年の東京オリンピックを視野に入れるなら、大学と劇場の連携による文化プログラムの構築や持続可能なレガシーの創出も期待される。

以上「池袋学」の展望を縷述したが、立教大学と東京芸術劇場の連携事業という点でいえば「池袋学」は数ある方途のうちの一である。その他のプロジェクト等も模索する必要があるであろうことをふまえた上で、次稿では都市における地域学としての「池袋学」の可能性や意義、また同じく副都心における「新宿学」や「渋谷学」との比較など

について論じることとした。

【注】

- 1 拙稿「立教大学と、池袋のまち」(『東京人』第三二八号「特集・豊島区を楽しむ本」二〇一三年十一月増刊)。
- 2 牛笹浩・奥田道大編『盛り場・池袋の魅力』(時潮社、一九八五年)、西山千明・奥田道大編『21世紀の都市型大学に向けて 立教大学「都市と大学」プロジェクト報告』(時潮社、一九九〇年)などの成果が刊行されている。
- 3 立教大学ESD研究センター編・発行「二〇一一年度 事業報告書 連携協定締結記念シンポジウム/ECO opera」『西池袋』を刺激する!—東京芸術劇場×立教大学による持続可能な地域づくり—(二〇一二年)二頁。
- 4 本節および第二節の記述は、論旨の都合上、拙稿「東京芸術劇場と立教大学の協働可能性を考える」(注3掲出の報告書『西池袋』を刺激する!)所載)と重複する部分があることをお断りしておく。
- 5 「Eco Open Programs for Education and Research Activities」の略称。地球環境の保全・環境教育に取り組む産公学が連携し、市民との関わりの中での活動を目的とする。ESD研究センターに参画する教員が監修し、立教大学が主催するプログラムであり、二〇一二年度以降はESD研究所でも継承されている。
- 6 注3に掲出の報告書を参照されたい。
- 7 立教大学が協定を結んでいる岩手県陸前高田市との交流展「つながる」(二〇一二年)を東京芸術劇場との共催で実施。大学と劇場の連携の一環として被災地支援事業を継続的に行なっている。
- 8 プレゼミナーとして、ゼファー池袋まちづくり主催の「みどりの公園で街が変わる」(二〇一二年四月二十三日、池袋ウエストパークビル)を開催。阿部治氏、甲斐徹郎氏、宮崎雅代氏(NPO法人日本トピアリー協会理事長)、高萩宏氏、石森宏氏、小林俊史氏(司会)が登壇した。
- 9 立教大学ESD研究所編・発行『Eco Opera』シンポジウム報告書『西池袋』を刺激する! Part 2—豊島区制施行80周年で西口公園が変わる—(二〇一三年)を参照のこと。
- 10 小林俊史「池袋西口公園における社会実験—西池袋みどりのアートカフェを中心に」(『西池袋』を刺激する! Part 2)注9に掲出)を参照のこと。なお、この社会実験は二〇一六年三月まで続き、同年四月からは、地元商店街・町会・企業・NPOからなる「池袋西口公園活用協議会」が、豊島区と公民連携したパークマネジメントによって、池袋西口公園という公共空間の新しい価値創造や運営をめざすとりくみをはじめた。
- 11 『西池袋』を刺激する! Part 2(注6に掲出)二十三頁。
- 12 二〇〇二年、國學院大學は創立百二十年記念事業として「渋谷学」を創設。二〇〇八年から新体制で渋谷学研究会を再発足、定期的に研究会を実施するとともに「渋谷学叢書」を雄山閣から刊行している(第一巻・二〇一〇年〜第四巻・二〇一五年)。

- 13 二〇〇四年、早稲田大学オープンカレッジ講座のひとつとして開講。二〇一二年まで百六十回の講義を行なった。戸沼幸市編著『新宿学』（紀伊國屋書店、二〇一三年）を参照のこと。
- 14 高秋宏「池袋学への期待」（『池袋学講演録 二〇一四年度』「池袋学」事務局、二〇一五年）。
- 15 渡辺憲司「池袋学事始」（『池袋学講演録 二〇一四年度』注14に掲出）。
- 16 秋山伸一「やあー！ どう？ げんき？」をふたたび—林英夫先生の遺志を次代につなぐために」（『生活と文化 豊島区立郷土資料館研究紀要』第十七号、二〇〇八年三月）。かつて池袋に存在した教育機関や大正期における自由教育等の問題については、改めてテーマを設定すべきであろう。
- 17 注15に同じ。
- 18 概要は http://www.rikkyo.ac.jp/feature/lecture_report/2014/02/post-140.html（二〇一六年五月一日閲覧）を参照のこと。
- 19 たとえば、国立文楽劇場と関西学院大学の協定締結（二〇一〇年）にもとづく「事業や、大阪市立大学で二〇〇四年度から開設された文楽技芸員と大学教員による文学部特別授業「上方文化講座」がある。これらはいずれも、大阪で歴史的に育まれた人形浄瑠璃文楽を視座に学生や市民が学ぶ場をつくる点で共通している。近年では京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターと文楽技芸員の共同で失われた浄瑠璃の復活に取り組んでいる。秋田県仙北市に拠点を置くわらび座（わらび劇場）と秋田県立大学が二〇〇七年に
- 連携協定を締結。国産原料による地ビール等の共同技術研究開発とその成果の地域社会への普及促進や、都市児童と農村の自然体験学習を通じた交流教育プロジェクトが推進された。わらび座は二〇〇八年に秋田大学とも連携協定を締結し、伝統芸能の共同研究などに関する協力を行なっている。
- 20 公益財団法人東京都歴史文化財団東京芸術劇場編『東京芸術劇場の25年』（公益財団法人東京都歴史文化財団東京芸術劇場編、二〇一六年）二二一頁も参照されたい。
- 21 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター編集・発行の『大衆文化』第十四号（二〇一六年三月）の特集を参照のこと。
- 22 福地茂雄・高萩宏・吉岡知哉・阿部治「西池袋の持続可能な地域づくりにおける〈劇場×大学〉による協働展望」（二〇一一年度事業報告書 連携協定締結記念シンポジウム／ECO opera「西池袋」を刺激する！—東京芸術劇場×立教大学による持続可能な地域づくり—注3に掲出）における吉岡総長の発言（二十二頁）による。
- 23 たとえば、地域のオーラルヒストリーをナラティブな記憶として映像化（アーカイブ化）し、記録する、NPO法人「としまの記憶」をつなぐ会は、住民主導のボトムアップ型の活動であり、大学生（立教大学、大正大学）が地域の高齢者にインタビューするといった世代間交流もなされている。
- 24 福井延幸「地域学としての『落合台学』の提唱」（『目白大学短期大学部研究紀要』第四十九号、二〇一三年一月）。

〔付記〕 本稿の執筆にあたり、立教大学総長室社会連携教育課の近藤泰樹氏、東京芸術劇場事業企画課の三谷淳氏にご協力を願った。記して謝意を表す。なお、引用文中の「」内は引用者による注記である。

（立教大学社会学部教育研究コーディネーター）